午前十時始めといふから早くより參りました所が、從來の習慣が午前十時始といつても、午後四時に始まれば良いといふ樣なことの樣子で、とても早く始りさうにもなく、林内には泊る所が無くて一の關迄歸らねばならず、一行も最早歸京の念も生じて居るものですから、暑うはあるし、さう便々ダラリと待つても居られぬといふので、交渉の上田村から始めることゝし、田村は金子、鉢木は私と新氏、鞍馬天狗は栗谷が勤めましたが、扨是れから竹生島といふ段となつて、今日は寺の方は止めといふことになりまして、折角珍らしく見せて貰ふと思つて居たのですから、段々奬めても見、賴んでも見ましたが到底止めとなつて誠に殘念しました、菅野澄運といふ人は既に八十二歳の老僧で、是れは太皷方の家で、此日も番組には卷絹の一調を打つことゝなつて居ましたが、此人は兼てより一度は東京へ登つて對手をして見たいといふ希望もあつた樣子ですから、此日も進んで打つことゝなり、紀喜眞さんが對手で、卷絹は止め、羽衣の獨打をやられましたが、いゝ是れは確かなもので、拍子もよく手配りも正しく觀世流に相違ありませなんだ、衣を着た儘に太皷を持つて着坐し、翁の時に皷方が素袍を脱ぐ樣に、衣を脱いで打つので至極殊勝で良ふございました、狂言方は寺内の家筋には絶えてしまつて、土地の素人に演る者があるが、東京から黑人が來ては恥かしとてやらぬといふから、狂言方丈けは伴れて來ぬ事として呉れといふ、始め櫻井さんからお話でしたから、其の積りでしたら、參る時となつて、狂言方はどうも當てにならぬから、間は連れて來いといふことで伴れて參りましたら、兼ての話通り黑人が來たからか、能と共に中止であつたのか、狂言は遂にありませなんだ、尤も始めから番組にも狂言は載つては居ませんでした。

此の寺に能の創りし時代の事も聞いて見ましたがどうも分りません、併し無論德川時代後のことで、元は仙臺から、伊達家の役者が出掛けて行て奉納したものが、其後寺の僧の扶持が不足で困る所から、能をすることを始めて、此方で更に伊達家から扶持が付くことゝなり、爰に始めて十八房の寺々に其々役が定り、代々其の家藝として傳ふることゝなつたものらしうございます、シテは喜多、ワキは高安、笛は一噌、小皷は幸、大皷は大倉、太皷は觀世の流水を汲んで居る樣子ですが、是れも皆伊達藩の例によつて居る樣です。

舞臺は此の寫眞の通り中々立派なもので、寸方も定ずに出來て居ります、斯く大木の中に在つて深々と良い心持ですが、意外にも風透さが惡くて暑いには閉口しました、番組の拵へ方などにも體して差はありませんが、ツレの位置が少し變つて居ます、當日先方で初める筈であつた竹生島で其例を示して見れば左の通りです。

佐々木亮順

竹生島　ツレ　北山領良詮　菅野　澄湛　菅野　弘
ワキ　菅野　亮寛　佐々木幸秀　菅野澄源

古劇の改良と破壞

古市公威

昨日着した佛蘭西の或る新聞に、「ジャック、アルナブヲン」といふ人が、モリエルの作の「タルチフ」

といふ全部詩で出來て居るクラシック劇を、其の文章の儘一字も變更せずして、「トロワ、ユニテ」即ちクラシック劇の原則に拘泥せずして、其の劇を面白く演じる樣に改め樣として居るが、隈りに古劇に變更を試みるは或は破壞に終るも知れぬといふて其の輕舉を戒めて居る文章が載せてあつたが、クラシック劇の改革を唱ふるは恰も日本の能樂の改革を唱ふると同じ樣なもので、歐羅巴にもこんな風が吹き出すと、日本にも亦同じ樣な議論が出來るかも知れぬと思ふてチョト注意を惹いた、ナニ「クラシック」劇といふことか、これは希臘古代の事を仕組める劇で、敎育上人の模範ともなるべき正しい劇で、先づ正風劇とでもいふべき風のもので、先般も話した、佛蘭西が多くの國費を投じて設立して居る俳優學校の卒業生などが皆此の劇の役者となるので、政府の厚き保護を受けて居る所謂國劇であるのだ、此の劇には「トロワ、ユニテ」即三つを一つのものとするといふ意味の三つの動かす可らざる原則があるので、其の一つは主人公の働きの終始一貫で、彼の船辨慶の如く、前シテは靜て、後ジテは知盛といふ樣な類は此の原則に背いて居るので、能の多くの如く、シテは前後通じて同じ人物でなくてはならぬといふのである、第二は時間の一致で、日本の芝居の樣に前の幕では十年前の事をしたが、次の幕では十年後の事をするといふのは勿論のこと同じ劇の內で時間の相違することはせぬといふのが此のクラシック劇には動かされぬ原則の一つとなつて居る、第三は場所の一定で、此場では大阪の事をするが、舞臺が廻ると東京のことになつて居るといふ樣なことは許さぬので、三保の松原で始つたことは三保の松原に終り、甲屋の內の事は甲屋の內で終るといふことゝなるのである、依つて舞臺の裝飾も場面に依つて背景の變るといふ樣なことはなく、一つの芝居には一つの背景で濟むといふことになるのであるが、實際やつて見ると、隨分無理が當るので、追々劇に變化を與へて面白くせねばならぬといふ自然の要求から、次第に此の原則は毀れかゝつて、近來の作には大分此の原則に背いて居るものも出來て居るが、此の劇の出來た當時、即ちルイ十四世の頃の有名な作者の作は皆悉く此の原則に當て適めてある、ルイ十四世の時代にはモリエルの外にコルネイユとかラシインとか有名な作者も數々顯はれて居るが、モリエルは就中勢力を得たもので、佛蘭西の文藝界では、モリエルは殆んど神樣の樣に尊崇して居る、是れに就て一つ面白い話は、或る時佛蘭西人と英吉利人とが寄つて互ひに自國の劇作者の自慢話をしたことがあつて、佛蘭西人はコルネイユやラシインの事を褒めて其の豪いことを主張すると、英國人はセキスピヤを持出して之れに抵抗したが、色々競べて見ると、どうもセキスピヤの方が優つて居るので、佛蘭西人の負け色となつて來たので、佛蘭西人は其所てモリエルを持出して是れはどうかとやると、英國人は、負けぬ氣になつて、ナニあのモリエルといふは佛蘭西人では無い、あれは神樣が一つ人間を笑はしやらうといふ考へから、天使として地球上へ下したもので、其の降す時に、調子を取り違えて、誤つて佛蘭西の地へ落したのだといふたといふ話がある位で、モリエルといふと殆んど人間ではないと迄崇められて居る作者である、コルネイユやラシインは悲劇の作者でモリエルは喜劇であるから、一樣には行かぬが、コルネイユやラシインは右の原則を實に嚴重に守つて書いてあるが、モリエルの方は腕の豪い故か、原則は守つては居るが、其の文章を其儘に働かして解釋すると、中には廿四時間內ではとても出來ぬ樣なことがあるので、言はゞ無理に其原則に當て適めたので、出來得る限りは其の範圍を廣めて面白く仕組まれ居る、「ジャック、アル

ナブヨン」の改革論も其所から起つて來たので、モリエルの作つた文章は一字一句も變更せないで、前に言ふた三つの原則に拘泥せずして、其の文章を十分に働かして見ようといふのである、佛蘭西に於けるワグネル劇の改良、日本に於ける能樂の改良、考へ合せて見るとチヨト面白い對照である、

右の一篇は八月十日能樂會用にて博士邸に伺ひしとき、用談終りて後フト博士の話されしを唯記憶の儘に書き綴りしのみにて校閲を經しものにあらざれば、文責の記者にあるは勿論なり。

一惣ジテ地謠ハ中入ノ間目ニ立ツユヘ彌行儀チヨクスベシ
一靜ナル能ハ調子ユルマヌ樣ニスベシ
一早キ能ハ調子上ラヌ樣ニスベシ切ソ留ニ調子上ル事ハ古人甚ダ戒メタル事ナリ愼ムベシ（喜多七太夫長景）

謠曲中の佛語

羽峰　賴政

○喜撰法師　傳詳ならず。或は桓武天皇の裔と云ふ。古今集の序に、「宇治山の僧喜撰は言葉幽にて始終確ならず」などあつて、唯一首「我が庵は」の歌をのせて居るだけである。恐らくこの一首だけの作歌には止らぬのであらうが他は傳はつて居らぬので惜しい事である。

○惠心の僧都　比叡山慧心院に住せる源信僧都のこと。天台の碩學で又淨土念佛の盛なる唱道者であつた、淨土宗の開祖源空も始は此の人の風を慕うて念佛に趣いたのである。

○平等院　山城宇治にある。もと源融の別莊であつたのが後傳へ〳〵て藤原道長その子賴通に傳はり、賴通の薨後、永承七年に佛寺としたのである。其の本堂は鳳凰堂と稱へて本尊阿彌陀如來である。壁畫は種々極樂淨土の有樣を畫き出したもので、悉くこれ平安中期の盛なる美術を示して居る、總て國寶として珍重せられ、數年來修理に着手して居たが、もう出來上つた事であらう。坊は天台宗と淨土宗との二ヶ寺あつて、その關係は信州善光寺の大本願（淨土宗）と大勸進（天台宗）との間からの樣なものである。

○法體　佛法の敎に從つたる姿といふので、僧侶の樣に頭を剃つて居るのを云ふ。